

教育心理学教室教官の研究状況報告

この1年の歩み（昭和61年から昭和62年にかけて）

村上英治

1) 昨61年9月、阿部芳甫先生、11月に相良守次先生、そしてまたこの年5月には、依田新先生の悲報に接した。共に今日、貧しいながら一介の心理学徒としての私を、この道に導き、育てて下さった、恩恵深い先生がたを相次いでこうして喪ったことになる。それぞれ天寿を完うされたとはいえ、痛恨まことにきわまりない。心から御冥福を祈るとともに、その御霊前にまた私なりの精進をと誓うものである。

2) この3月、2期2年間にわたる学部長職から離れることになった。附属学校長からひきつづいて管理職にあること5年になる。学部運営の仕事はたしかに多端ではあったけれども、学ばされることもまた多かった。とりわけ複教授導入にともなう入学試験改革をめぐっての多難の年に、教職員各位、学生・院生諸君の協力を得て、ともかく何とかその任を果たし得たことに、ここで深く感謝の意を表したい。

3) この職にあったが故にであろうが、この1月、文部省在外短期研究員（特別）として海外出張の機会を与えられた。南京大学及びシンシナティ大学との大学間国際交流の促進が、その主要な目的ではあったが、旅程はきわめて短時日、僅か16日間のうちに、中華人民共和国は、上海・南京・北京と、さらにドイツ連邦共和国、マンハイム・ハイデルベルグを経て、アメリカ合衆国、シンシナティ・ロスアンジェルスと、それぞれの大学をそれぞれかけ足で訪問したにすぎない。しかしながら、初めての訪中の場で講演を行ったり、欧米各地で旧知の仲間と交流を深めたりすることができたのは、それなりに意義深いものであったと考える。

4) 心理教育相談室が文部省から認可されて、正規の施設となって3年目に入った。当初の懸念をふきとばすかの如く、料金有料化となったにもかかわらず、来談業務はむしろ増大し、教育研修の場としての臨床実践活動が一層活発に行われている現況は、まことに喜ばしい。

それだけに当然のことながら、心理臨床家としての「ココロ」を練り、「ウデ」を磨くべく、相談室員自身

の切磋琢磨が改めて要望されることになる。そうした自己研修、相互研修の成果として、「心理臨床——名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要——」第1巻、第2巻と、この期間中相次いで2冊刊行することができたが、今後一層その内容の充実に努力をつづけたいものである。

第1巻の冒頭に、私自身、「伴侶者としての私」と題する巻頭言を寄せ、臨床という営為の根底にある人間関係の本質について、若干の提言をした。臨床を志すこれからの若い仲間によくを期待したいが故にである。

この4月からはまた、心理教育相談室長としての責任をも荷わされることになった。いわゆる「臨床棟」の明日に向かっての活性化をめざすことに、微力を捧げたいと考える。

5) 大学院生を中心とする若手臨床家の相互研修の場として、〈五大学臨床〉と通称する、関係五大学の合同症例研究会が回を重ねてその実をあげるようになってきている。今年もまた東京大学の世話によって、奥箱根で多くの同学の仲間の参集を得た。先に述べた巻頭言は、昨年名古屋での、この研究会におけるシンポジウムの席上、発言した趣旨にもとづくものであり、この線に即しても、次代のわが国の臨床を背負うべき五大学の若い人々が、内的資質の向上をめざして精進する姿に深い敬意を表したい。

6) 臨床心理学への志向性、そしてまたその必要性は、こうして全国的にもいよいよ高まってきている。日本心理臨床学会も発足以来5年にして、会員数2,700名を越えた。その多くの人々が、社会的要請にもそって、その外的枠組として要望する資格問題も、今日緊急の課題である。事実、この学会で年次総会ごとに積みあげてきた足どりは、各地域での研修活動をもふまえて、一段と着実に進められつつある。任意団体としてはあるが、「日本臨床心理士資格認定協会」設立への方向性が醸成されてきているだけに、この11月23・24・25、三日間にわたって、当名古屋大学で開催される予定の第6回大会

で、さらにまた具体的な歩みとして展開することを、心から期待する所以である。

7) 重度・重症心身障害児への私なりのアプローチも、今年でコロニー実習は18回目を重ね、MR療育も17年目に入った。それらの総決算をも含めて、この年昭和62年度の科学研究費を得たのを機会に、大規模な交流の集いが企画されている。9月26・27両日、「心身障害児療育の明日をめざして」と題する交流シンポジウム、交流運動会、交流懇親会はその一環である。

現時点における総括としては、東海心理学会第36回静岡大会に報告したのものにもとづき、本紀要にも、「重度・重複障害幼児の集団療育(10)——子どもとの全人的かかわりを求めて——」と題する論稿を、後藤秀爾らとともにまとめて提起した。

8) 例年の学生相談研究会議は、この年も新年早々、1月8・9・10の三日間にわたって、香川大学の担当、五色台で開催された。昭和43年宮島で最初の集まりをもって以来、ちょうど20年目になる。発足以来、ほとんど毎年参加しつつ来たもの一人として、教育制度の時代に伴う変革に即応した、キャンパスにおける新しい学生相談の在り方を模索してのこれからの展開に、今後いよいよ多くの期待を寄せたいところである。

この会議終えてあと、会員のひとりから提案された、教官エンカウンター・グループの再開に共鳴し、この7

月9日から12日まで、信州富士見高原で10数名の仲間と共に、改めて出会いの場を得たことも、かねがねこの種の企画の中断をわびしく思っていた私にとって、この年心に残る忘れがたい体験であった。

9) 名古屋大学を来年3月、停年でいよいよ退官することになる。昭和26年、医学部精神医学教室に入局して以来、教養部での14年を中にはさんで、教育学部を中心とする、私自身の37年間にわたる名古屋大学での在職の日々をふり返って、感懐またひとしおのものがある。

よき先輩、同僚、学生諸君にめぐまれて、ほんとうに充足した名古屋大学での生活であった。1年1年忘れがたい思い出にみちている。とりわけいわゆる大学闘争のあと、大学の民主化をめざしての変革に、私なりにかなりの情熱を傾けた中で、その一端として、教育心理学教室における教官のその年ごと、一年間の研究状況報告を、その年度の紀要に寄せることを相互の義務づけとして申しあわせて、それを厳しい自己課題としてきた私は、「この一年の歩み」が、まさしく年度ごとの一里塚でもあった。昭和45年以来、18回つづけて寄せてきた、この「歩み」の集積が、私にとっては名古屋大学にのこす、唯一の遺産ともなる。お世話になった多くの各位に、心からなる謝意を表して、私にとって最後の「この一年の歩み」の筆を擱くことにしたい。

(昭和62年8月18日)

研究経過報告—— '86年秋～'87年夏——

小 嶋 秀 夫

この1年の内になんらかの形で成果の出た新しい活動から報告して行く。まず、日本教育心理学会第28回総会(1986年10月、福岡)でのシンポジウム、「教育心理学における“一人の被験者”(N=1)アプローチと“多数者=統計的”アプローチをめぐる」(企画・司会:山内光哉)において、「発達研究におけるシングル・ケース研究をめぐる」というテーマで提案を行った(教育心理学年報, 1987, 26, 10-11. [抄録])。

次に、第88回日本医史学会総会(1987年4月、東京)で、「明治初期の翻訳育児書」について発表した(日本医史学雑誌, 1987, 33, 90-92. [抄録])。これは、明治7, 8, 9年に翻訳・出版されたアメリカ、ドイツ、イギリスの育児書について、その原典、原著者、翻訳書、

および翻訳者についての調査・比較分析結果と、19世紀の西洋で母親向けの育児書が現れ、さらに1870年代後半から暫く、わが国でそれらの翻訳が盛んに行われた社会的背景について報告したものである。その後、学会発表時点では不明であった近藤鎮三(翻訳者の1人)の生年月日や肖像写真の所在も分かり、さらに分析も進んだので、そのうちにフル・ペーパーにする予定である。なお、これに関する調査・資料収集過程において、本学部の江藤恭二・篠田 弘両教授(教育史)からたびたび親切な教示を得たことに感謝する。そのほか、米独の図書館、本大学付属図書館員、日本司法博物館、近藤家を初め多くの機関・個人のお世話になった。また、近藤鎮三についてすでに研究発表されておられる方(加納正巳静岡県立大学教